

赤貧庵の客 ■ 志村博子



赤貧庵の客

志村博子

赤貪庵の客 ©

発行日 昭和四十二年十一月一日

著 者 志村博子

印刷所 銀嶺印刷

製本所 あきば印刷製本有限会社

発行所 浦和市瀬ヶ崎三〇七塔の会（電話〇四八八―三二―三〇四八）

定 価 五五〇円（送料九五円）

目次

赤貧庵の客	△四十五枚▽	五
作家M氏の場合	△十九枚▽	三八
生きる日もの憂く	△四十九枚▽	五二
濁	流 △八十六枚▽	八六
濡れた草履	△三十七枚▽	一四八
か	び △二十一枚▽	一七五
旅の	夜 △二十一枚▽	一九〇
ゆ	め △二十三枚▽	二〇六
みちく	さ △二十二枚▽	二二三
朝の	湾 △二十五枚▽	二三九
あとがき		二五七

装
丁
志
村
史
夫

赤
貧
庵
の
客

赤貧庵の客

そのバラックは、主人の友人達の間でいつの間にか「駒込の赤貧庵」と呼ばれていた。当時まだ建増しをしていなくて、わずか十六坪の敷地に、四畳半と二畳の部屋が壁なし天井なしで高いところに小さな窓が二つと、南側に二八の窓が一つあるきりなので、遠目には一寸大きな鳩小屋のように見えるのだった。

屋根は最初、ルーフィングという黒い油紙が張られていたが、風の吹く日はそれがハタハタと音を立ててめくれ、雨の降る夜は雨水が容赦なく粗末な畳に落ちてきて、家中のすべての器を並べても、追いつけない騒ぎになるのだった。

そんなとき狼狽した細君が、恥も外聞もなく悲鳴に近い声をあげるので、腰の重い主人も、その奇声を耳にしているのに耐えられず、やっと月賦でトントんに葺き代えたのである。

ところが、このトントン葺きも、もはやその頃としては余り類がなく、近くに火事が発生し

て、消防車のサイレンがけたたましく辺りに響きだすと、家の者は勿論のこと、隣組の人達までが、赤貧庵の屋根を気にし、表へ出たり引込んだりして、火の粉の行方を追っている有様であつた。

このような騒ぎのあつた夜、細君はきまつて一つの恐怖におそわれるのだった。それは、同じ隣組に住んでいて、クバカヤロウ親爺々という異名を持つ、ブリキ屋の六さんが焼酎を飲んでは顔を真っ赤にし、必ずやってくるからである。

もと六さん一家が住んでいた家は、終戦間際に爆風のおおりですつとんでしまい、現在は焼けトタンで半地下に出来ていた。四十七歳の六さんは、働く時はめっぽう働くが、怠けだすと何日も家を空け、妻子を放ったらかして、なじみの酒屋に入りびたり、焼酎を飲みつづけている習性があつた。

六さんは、原っぱの片隅に作った重苦しい半地下生活の鬱憤を、いつも何かにぶっつけていないと氣持がおさまらないらしく、どんな些細なことでも、近所の弱点を掴むと、焼酎の勢いを借りて、怒鳴り散らしているのである。

最近自分の家の近くに、最低普請のバラックにしろ、一応地上に建った真新しい赤貧庵に對しては、最初から羨望と、敵愾心を抱いていたらしく、ことごとに冷たい眼差しで陰口を叩い

ていたのである。

アルコールが入ると、細君にもときどき泣きたくなるような言葉を浴せかけた。

「おめえの家は、ありゃ一体なんだ。まさか、鳩ぼっぼの宿でもあるめえ。それともあの上の方についている小さな二つの窓は、便所が二つあるってことか。いい加減にしろい」

そんなとき、細君は返事に窮し、ただ俯いて、異様にすわった六さんの熱っぽい眼から、なるべく遠ざかっていようと考える。だから、近くに火事のあった日は、きっと、六さんが夜おそく、焼酎で倒れそうになる身体を、赤貧庵の貧弱な下見板にぶつつけながら、「バカヤロウ！」を連発するのを覚悟しなければならない。そして、それは細君の心臓を懷えさせることであった。

「バカヤロウ。てめえんちがトントンだから近所めいわくさせるんだ。いい年をしやがって古本ばかり読んでる暇があったら、いい加減で火の粉の心配のいらねえ屋根のことでも考えろ。おれがこんな家、ぶっこわしてやらあ。バカヤロウ！」

口汚なくそう怒鳴り、ドカン、ドカンと酔った身体をぶつつけながら、三十分も十八番のバカヤロウを声高につづけている。主人が在宅しているときでも、何の恐れもなくこれをつづける。

赤貧庵の主人は、どちらかというところ、事なかれ主義なので、面倒な事が現在より大きくならないようにひっそりとしていて、絶対に外へ出ていけないし、なるべく聞いて聞かないふりをしている。細君もまた至って小心者なので、寝ついた子供の目を覚まさないようにして、耳を塞ぎ、ただおろおろとしているばかりなのである。六さんの「バカヤロウ！」は夜ふけの町に頭の芯が痛くなるまで続くのであった。隣組の人達も誰一人として、この六さんの怒声を宥めたり、しずめたり、やめさせようとはしないのである。誰もがさわらぬ神に祟りなしの姿勢で六さんの行状を雨戸の中であかがい、鳴りのしずまるのを待っている。そのうち、半地下の六さんの家から、鳥目の女房が足もとをふらつかせながら、泳ぐような格好で出てきて、

「とうちゃんてばさ。いつまで馬鹿なことを言ってるんだよ。いい加減で家へ入りな」

と、手探ぐりで六さんの身体を捕まえようとするが、六さんはこのひとまわり以上も年下の鳥目の女房を全く無視しているので、中々言うことを聞かない。手をやいた女房は、仕方なく口の中で、

「ほんとに近所めいわくなかった」

と、それはどちらに言うともなく呟き、半地下の家に戻っていつてしまうのである。

そうしているうちに、やがて怒鳴り疲れた六さんは、そこへしゃがみこむと、赤貧庵の板壁

にもたれかかり、性根もなく眠りこんでしまうのだった。

すっかりしずまった頃を見計い、主人が出ていって、六さんの重い身体を引っ張りながら、冷んやりした六さんの半地下の家まで運びこむのが常であった。

翌朝、まるでケロリとした顔で、頭をかきながら、六さんがペコペコと低姿勢で謝りにくると、もうそれで昨夜の台風のような乱行は、御破算ということになってしまう。

しかし、このようなことが今までに、数回も繰返されていたのだから、細君はどうしても気がさがさっぱりとしないのである。

一年前に八ヶ岳山麓の疎開地から一人上京してきた主人が、幸い友人の世話で、N新聞東京支社出版部に籍を置き、そのおかげで、金町にある繊維会社の独身寮のようなアパートの一室を借り受けることが出来た。しかしほととしたのも東の間で、疎開地にまだ子供と残っていた細君のお腹が思いがけなく大きくなり、どうしても東京へ呼ばなければ、つまり二つ窯では今後の生活が成り立たない状態になったのである。

早く何とか一部屋借りてほしいという情報が、矢継ぎ早に主人の独身寮を脅かした。

主人は仕方がなく、新聞社が退けると、代用食をかつこみ、あちら、こちらと貸間探しをは

じめたが、ましてこれからお産をする細君をつれて住みこめるような部屋はどこにも見当らなかった。

一人住いの不便さに加えての、この主人の困窮ぶりを見るに忍びず、旧友の柿崎画伯がある日、二つとない吉報をもたらしたのである。それは、柿崎画伯のまだ垣根もしていない庭のカギの手になっているその一番奥の、十六坪ほどの土地を、権利金も必要としないで、貸してくれるということであった。

「とにかく、そこへバラックでも建てたらどうですか。どんな粗末な家でも、雨露をしのげたら、よその部屋を借りるより、どんなにかましですよ。住居が出来上ったら、窓硝子ぐらいは、ぼくも寄付させて頂きましよう」

柿崎画伯の友情溢れるこの言葉は、主人を心底から感謝させ、早速疎開地の細君に伝えられた。

けれども、考えてみると、一体バラックといっても、どのくらいお金を用意したら出来るものなのか、主人は見当がつかず、ここでまたはたと困惑してしまうのだった。

ともすれば、栄養失調に陥りそうなときの頭脳で、主人はそれから昼となく夜となく、お金の算段をしなければならなくなった。

そのようなある日、勤めの帰りに、ふと目に入ったのが、新橋駅前広場で青写真を大きく伸ばし、誇大に宣伝されていた「一万七千円住宅」であった。

主人は夢かとばかり飛びついたのである。それくらい金なら何とかなりそうに思えた。しかも、その「しろがね建設」という広告主を訪ねて、事情を話してみると、頭金七千円出せば、直ちに工事に取りかかるという、誠に親心のある話である。

都心のビルの一階に事務所を持ったしろがね建設を疑る余裕など更になく、主人は持金のすべてをはたいて、頭金としたのであった。

疎開地に残してある細君のお腹の進展工合を考えると、主人は一日たりとも安閑としていらなかった。毎日、新聞社が退けると、しろがね建設へお百度をふんだ。けれども、そうした主人の根気と努力も空しく、その後は一向に埒があかないのである。そのうち、残金を請求してきた。今となつては、もはや引き退ることも出来ない主人は、やっとの思いでその金を工面して払い終ったが、更に日が経っても、しろがね建設からは何の沙汰もなかった。

日曜日がくると、主人は柿崎画伯の庭の片隅へ出かけ、やがては我が家が建つであろう、その十六坪の敷地に、心からの愛着を感じ、一人でこつこつと地均しをし、土を突ついて、敷地を堅める作業を繰返した。

しかしその後、幾度催促しても、しろがね建設からは薦職も大工も来なかった。

不安になった主人が、しろがね建設にはじめて疑惑を抱いたときは、既に遅かったのである。

その朝の新聞に、しろがね建設の社長の三室銀平が、詐欺で捕ったという記事が小さく載っていたのであった。

気の小さい主人は、くらくらと眩暈を感じた。だめだ、と思うと、もう全身の力が抜けていきそうになった。

ところが、不思議なことに、そんな記事が新聞に出た日から二、三日して、しょんぼりした大工が一人、十六坪の土地に現われたのである。

「わたしが、お宅の工事を請負った野畑という者です。以後よろしく願います」

彼は、ぼそぼそとした声でそう言った。それから一層低い声でこんなことをつけ足した。

「わたしは、戦災で妻子や家財を全部なくしました。あわれな一人者です」

三十四歳だという、その大工は年よりぐっと老けて見え、どことなく栄養にも欠けている艶のない顔色をしていた。そして野畑という、その大工には、善人によくある内気な弱々しさが見られた。

詐欺で捕ったという、しろがね建設の社長が、なぜこのような善良そうな大工をここへまわ

してきたのか謎のようであったが、とにかく野畑はしろがね建設から若干の金は預かってきたらしく、自分で材木を担いできて、一切一人ではじめたのである。

野畑は毎朝早くやってきた。基礎になる石はそのへんに転がっているもので充分だった。また、数日して彼はどこからか便所の甕を拾ってきて、「これ一つでも助けましょう」と言いながら、きれいに埋めてしまったが、翌日思いがけなくその甕の所有者が現われて、丁度そこに居合せた主人を恐縮させた。主人は大急ぎでヤミ煙草を買ってきて、野畑と一緒に詫びたりした。野畑は頭をかきながら、

「いやあ、申訳ありません。旦那に少しでも余分な金を使わせまいと思ひましてねえ」と、すまなそうに言った。決してずるい眼ではなかった。

彼は普通の大工なら嫌がるであろう薦職の仕事まで、黙々と自分一人でやってのけた。

しろがね建設では、最初だけ野畑に金を渡し、その後彼がいくら取りにいても、二度と追加の金を渡そうとしなかった。困り果てている野畑が気の毒で、それからは主人自身が、柱何本、板何枚、垂木何本というように、ちびりちびり材木店から買ってきては野畑に渡した。

野畑はどこから通ってくるのかわからなかったが、弁当箱だけは大量立派なものを持っていた。正午になると、ゆっくりと弁当箱を開き、時間をかけて楽しそうに弁当を食べていた。

たまに、柿崎画伯の家からお茶や漬物などを出してもらうと、ひどく恐縮して、何度も頭を下げていた。主人も暇のあるときは、その場所へ出向いて、出来る限り野畑に協力した。

やがて、バラックがそれでもどうやら人間の住める家らしく見えはじめた頃、しろがね建設から妙な手紙が、主人のもとへ送られてきた。

——前略、実は貴殿が新聞社の方なので、この難工事を特にお受けしたのです。既に御存知かと思いますが、社長の三室銀平は現在K署に留置されています。大したことはないと思います。——
が、それにつきまして、今後何かと貴殿のお力を貸して頂きたいのです。——

という文面であった。どう考えてみても、納得のいかない奇妙な手紙であり、薄気味が悪いのである。主人は半ばあきれて、この手紙のことを野畑に話した。野畑は丁度昼休みで一服つけているところであった。

「いえね、わたしも最初、お宅さんの工事のことを聞いて、妙だと思っていましたよ。お宅さんより、もっと早くお金を沢山取上げている人が何人もあるのに、それには手もつけないんですからね。やはり新聞社の人はこわいのでしょうか。わたしも、もうこれっきりにしようつもりです。ここを何とか早く仕上げて二度とあんなインチキ建設のお世話にはなりません。どうせ一人者です。どこの土地へいったって食べていけるんです。ろくに手間賃も出さず、材